Global Storybooks

globalstorybooks.net

ミツオシエの仕返し

Zulu folktale
Wiehan de Jager
Akiko Nagayama

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution 3.0 International License.
https://creativecommons.org/licenses/by/3.0

ミツオシエの仕返し

Zulu folktale
Wiehan de Jager
Akiko Nagayama

4

日本語 ja

これはミツオシエという鳥ンゲデとギンギーレという名の欲の深い若者の話です。ある日、ギンギーレが狩りに出かけていると、ンゲデの鳴き声を聞きました。ハチミツのことを思うと、ギンギーレの口によだれが出てきました。彼は足を止め、注意して耳をすまし、鳥の姿を探し、そして頭上の枝に鳥がいるのを見つけました。「チテック、チテック、チテック」その小さい鳥は、次から次へと木を飛びながら、カタカタと音を立てました。鳥は、ギンギーレが後について来ているのかを確かめようと、時々止まりながら、「チテック、チテック、チテック」と鳴きました。

３０分たつと、彼らはとてつもなく大きな野生のイチジクの木にたどり着きました。ンゲデは枝の間をすごい勢いでピョンピョンと飛び回りました。それからンゲデは一本の枝にとまり、まるで「ここだよ。さあ、来てごらん。何をグズグズしているのかね? 」と言わんばかりに、ギンギーレを見て、頭を上に向けました。ギンギーレは木のふもとの方から一匹もミツバチが見えませんでしたが、ンゲデを信じました。

そこで、ギンギーレは狩り用のヤリを木のふもとに置き、乾いた小枝を集め、小さな火をおこしました。火が十分に燃えると、彼は火の中心に長くて乾いた木切れを差し込みました。この木は、燃えている間、たくさんの煙を出すことで特に知られていました。ギンギーレは煙が出ている木切れの冷たい方の端を歯にくわえながら、木登りを始めました。

そういうことで、ギンギーレの子供達がンゲデの話を聞くと、彼らはその小さな鳥に敬意をはらうのです。ハチミツを収穫する時はいつでも、彼らはハチの巣の一番大きい所をミツオシエのために必ず残してくるのです。

ヒョウがギンギーレをがぶりと食べる前に、ギンギーレは大急ぎで木を降り始めました。あまり急いでいて、彼は枝に飛びそこね、地面にドサッと落ちて、足首をひねってしまいました。彼はできる限り早くヨタヨタと足を引きずって歩きました。幸運なことに、ヒョウはあんまり眠くてギンギーレを追いかけることができませんでした。ミツオシエのンゲデは仕返しをし、そしてギンギーレは大切なことを学んだのでした。

まもなくギンギーレは忙しそうなミツバチの大きなブンブンという音が聞こえるようになりました。彼らは、木の幹の穴―つまり彼らの巣穴―から出たり入ったりしていました。ギンギーレはミツバチの巣に手が届くと、その穴に煙の出ている方の木切れを押し込みました。ミツバチは、あわてふためき、不愉快になり、怒ってしまいました。彼らは煙がイヤなので、飛んで出てきました。でも、ミツバチはその時にはもうすでにギンギーレに針で痛い目に合わせていました。

ミツバチが外に出た時に、ギンギーレは巣の中に両手を押し込みました。彼は、たっぷりのハチミツがしたたり落ちる両手一杯の重いハチの巣と、いっぱいのハチミツ油と白い蜂の子を取り出しました。彼は肩にかけてきた小袋にハチミツの巣を注意深く入れ、木から降り始めました。

ギンギーレは、いつものブンブンという音がどうして聞こえないのだろうと不思議に思いながら、木に登りました。「多分、ハチの巣は木の中の深い所にあるのだ」と彼はひそかに思いました。ギンギーレは別の枝に体を移しました。するとギンギーレは、ハチの巣ではなく、ヒョウの顔とにらみ合うことになりました。ヒョウは自分の眠りが乱暴に邪魔をされたのでとても怒ってしまいました。彼女が目を細め、口を開くと、とても大きくてするどい歯が現れました。

数週間後のある日、ギンギーレはンゲデのハチミツを知らせる鳴き声をまた聞きました。彼はあの美味しいハチミツを思い出し、もう一度その鳥の後を熱心についていきました。森のはずれをずっとギンギーレを連れて回った後、ンゲデは立ち止り、大きな傘のようなトゲのある木の所で休みました。「あ、そうか」とギンギーレは思いました。「ハチミツの巣はこの木の中にあるに違いないぞ。」彼は、素早く小さな火をおこし、けむりの立ち込めている枝を歯にくわえ、木登りを始めました。ンゲデは座って眺めていました。

ンゲデはギンギーレがしているすべてを熱心に見つめていました。ンゲデはミツオシエという鳥に対する感謝のお供えものとしてハチミツの巣の大きな一切れを残してくれると思ってギンギーレを待っていました。ンゲデは枝から枝をヒラヒラと飛び回り地面にだんだんと近づきました。やっとギンギーレは木の下に降りました。ンゲデは若者がいる近くの岩の上にとまり、若者のほうびを待ちました。

しかしギンギーレは火を消すと、ヤリを取り上げ、その鳥を無視して、家路につき始めました。ンゲデは怒って「ヴィクトール、ヴィクトール」と大声で叫びました。ギンギーレは立ち止り、その小さな鳥を見つめて、大声で笑いました。「ハチミツがほしいのか、おまえ、オレの友達か? フン! でもぼくがぜんぶ仕事をしたのさ、すっかりハチにもさされてさ。だから、なんで、この美味しそうなハチミツの分け前を少しおまえにあげなくちゃいけないのかな? 」それから、ギンギーレは歩いて行ってしまいました。ンゲデは怒り狂いました。これはンゲデが受けるような振舞いではありませんでした。やがて、ギンギーレはンゲデの仕返しを受けることになるで

しょう。